

遺跡発掘調査速報巡回展

2008 下田会場展

～縄文の昔から歴史と伝統を育んだ先人たち～

御淵上遺跡からみた八木ヶ鼻

平成20年7月3日(木)～7月6日(日) 午前9時～午後4時半

■ 会 場 下田公民館 ■ 入 場 無 料

■ 展 示 遺 跡

速報展示 戸口遺跡(戸口地内)、下町遺跡(西大崎一丁目地内)ほか4遺跡

テーマ展示 『縄文の昔から歴史と伝統を育んだ先人たち』

北浦A遺跡(大谷地地内)、高野遺跡(北五百川地内)、五百川遺跡(北五百川地内)、芋ノ原遺跡(笹岡)、
八木鼻第2号岩陰遺跡(北五百川)、長野遺跡(長野)、赤松遺跡(大谷地)、藤平遺跡(荻掘)ほか

■ 体験コーナー 「不思議な土器の文様!」「遺跡パズルにチャレンジ!」「ドキドキ文様付け!」「土器復元!」

■ 展示説明会 第1回7月5日(土) 第2回7月6日(日) いずれも午後2時から(1時間程度)

■ 楽しいイベント 第1回7月5日(土) 第2回7月6日(日) いずれも午前10時～午後2時
勾玉作り・ドキ土器プレート作り(各材料代200円必要)、縄文弓矢体験・火起し体験・縄文喫茶など(無料)

主 催 三 条 市 (市民部生涯学習課)

後 援 下田郷文化財調査研究会・五十嵐小文治館跡保存会・三条考古学研究会

しな の がわちくてい かみすごろ
信濃川築堤地区（上須頃ほか）

新しい堤防の工事箇所は、江戸時代まで^{やしき}屋敷があった場所です。遺跡が埋もれている可能性があるため試掘調査を行いました。2 m以上もの深さからガラス瓶^{びん}などが出土しましたが、古い時代の遺跡は発見されませんでした。以前あった屋敷跡は、明治時



代の堤防を造る工事の際に土取りされ失われたと推定されますが、さらに地中深くに埋もれている可能性もあります。

確認された敷石（近現代ものか）

しもちょう にしおおさき
下町遺跡（西大崎一丁目）

遺跡の広がりを把握するため部分的な調査を行い、約1 mの深さから柱穴などが見つかりました。^{いがた ろへき}鋳型・炉壁などの遺物が出土し、周辺部に^{かじ いもの}鍛冶・鋳物に関連した遺構があるものと思われます。

この遺跡は^{おおさき い も じ ほんきょう}大崎鋳物師の本拠地と推定され、三条の金属産業史を考える上で大変興味深い遺跡です。



確認された柱穴など

みなみやち にしほんじょうじ
南谷地遺跡（西本成寺二丁目）

本成寺地区の遺跡分布を調べる調査で発見された平安時代の遺跡です。この地区の集落に^{りんせつ}隣接する^{びこうち}微高地には、平安時代以降の多くの遺跡が発見されています。『^{こんでんえいねんしぎいほう}墾田永年私財法』により、低地の開発が盛んに行われたことが遺跡分布からわかります。

平成19年度は民間開発に伴い、遺跡の広がりを調べるため確認調査を行ないましたが、遺構、遺物は確認されませんでした。



確認調査のようす

いしだ す どしんでん
石田遺跡（須戸新田）

石田遺跡は須戸新田地内にあり、標高約6 mの自然堤防上に立地します。地表から約1 mの深さから南北・東西方向の溝跡や土坑が見つかりました。遺物は溝跡や周辺から^{すえき}須恵器の食器や^{はじき にたきぐ}土師器の煮炊具が出土しています。遺跡周辺部には^{おおつきがた}大槻潟があり、内水面利用や低地の開発を考える上で重要な遺跡です。



発掘された石田遺跡

あまがり しもほない 安曲遺跡（下保内）

よしづがわ
吉津川右岸の標高約 5.5mに位置します。県営ほ場整備事業吉津川地区に伴い調査を行い、溝跡や土坑、柱穴が確認され平安時代のムラの跡であることがわかりました。遺跡の北側では平安時代の木棺墓が検出されています。

標高が高い東側で遺構が集中し、特に南北方向に広がる溝跡や土坑が見つかりました。南北方向の溝跡はほぼ同じ向きであるため、同じ時期に使用されたと考えられます。遺跡の西側は地形が落込むため遺構は確認されませんでした。

過去の調査から、木棺墓が検出された北側や東側にムラの中心があると推定されます。



発掘された溝跡



発掘された木棺墓



出土した木棺



遺跡位置図

下田会場展テーマ展示

縄文の昔から歴史と伝統を育んだ先人たち

旧下田村の村民憲章には、「豊かで広大な自然に恵まれ・・・縄文の昔からの歴史と伝統に育まれてきました」という一節があります。下田地区ではこの言葉どおり縄文時代の遺跡が数多くあります。下田会場展では、「縄文の昔から歴史と伝統を育んだ先人たち」をテーマに1万年間続いた下田地区の縄文時代遺跡の出土品を展示します。

いもの はら 芋ノ原遺跡 ～縄文土器の発明と定住生活～ 縄文時代草創期

千代が丘保育所建設に伴い発掘調査された芋ノ原遺跡（笹岡）では、縄文時代草創期の土器片が出土しています。

今から約1万2千年前に縄文土器の発明によって、旧石器時代が幕を閉じ、新たな縄文時代が幕を開けました。縄文土器は、粘土に熱を加え形を固定するという化学変化を利用したもので、人々の生活を変えた画期的な道具でした。

火にかけても燃えず、水を漏らさず、食べ物をやわらかくなるまで煮ることができます。また、そのままでは食べられないトチやドングリなども、縄文土器で茹でてアク抜きすることによって、食べられるようになりました。この土器によるアク抜き技術の獲得によって森の恵みを主食にすることができました。人々はそれまで動物を追って点々と移動生活をしていましたが、森のそばにムラを作って定住するようになりました。



草創期の縄文土器（左）と尖頭器（右）



縄文土器による煮炊き

やぎ はなだい ごういわかげ 八木鼻第2号岩陰遺跡 ～岩陰に暮らす人々～ 縄文時代草創期・早期・前期

定住し始めると人々は自然にできた洞窟やそれより浅い岩陰を利用し始めます。市内には、八木ヶ鼻の絶壁に岩陰遺跡（北五百川）があります。八木鼻第2号岩陰遺跡では、縄文時代草創期から弥生時代にかけての石器や土器、火を焚いた跡などが見つかりました。

この遺跡は、岩に開いた小さなくぼ地で、前面は狭い平坦地となっています。特に縄文時代前期には、北陸・東北・関東・東海など様々な



八木鼻第2号岩陰遺跡（矢印）

地方の土器が見つかり、これらの地方と関わりをもったことがわかります。河川の合流点にそびえたつ八木ヶ鼻は、はるか遠くからも見ることができ、五十嵐川流域のランドマークになっていたからだと考えられます。

しかし前期以降土器の出土量は少なくなります。その場所に固定され、生活空間の伸縮が難しい岩陰の住居が人々の生活に合わなくなってきたと考えられます。集団の人数が増え、竪穴式住居が普及し、人々は広い河岸段丘上に移っていったのでしょう。

速報展示 ^{いもがわ}五百川遺跡 ～埋葬の儀式が行なわれた大集落～ ^{かがんだんきゅうじょう}縄文時代中期・後期

五百川遺跡(北五百川)は粟ヶ岳^{あわがたけ}の絶景を望む標高127mの駒出川左岸の河岸段丘上にある大集落です。

ほぼ完全な形の底のない土器が出土しました。辺りからは焼け石が多く出土し、^ろ炉に埋められた土器の可能性もありますが、周りの土は焼けていませんでした。そのため、炉跡ではなく、^{まいそう}埋葬の儀式^{ぎしき}に伴って別の場所で火が焚かれ、それが終わった後、骨を土器に納め、焼け石とともにこの場所に埋めた可能性があります。縄文時代後期前半(約3,500年前)の土器です。



埋葬の儀式に関係した焼け石と縄文土器

速報展示 ^{たかの}高野遺跡 ～粟ヶ岳のふもとの暮らし～ ^{かがんだんきゅうじょう}縄文時代中期

粟ヶ岳の登山道沿いにある高野遺跡(北五百川)は、ほ場整備に伴い192㎡を本発掘調査したところ、溝1条、ピット78基の多数の遺構と遺物が出土しました。

この溝は平安時代ごろのものと考えられ、もともとの沢状の地形を掘削したものと考えられます。溝からは流れ込んだと考えられる旧石器時代と縄文時代の石器が出土しました。

溝の北側と南側には多数の建物跡が出土しました。調査地は駒出川を見下ろす高台であるため、^{みはらしだい}見晴台のような建物が建っていたものと考えられます。



発掘された溝

ながの 長野遺跡 ① ～火焰型土器に秘められた縄文人の世界観～ 縄文時代中期ほか

長野遺跡（長野）からは、縄文時代の代名詞として知られる火焰型土器が出土しています。火焰型土器は、東は栃木県、西は富山県、南は長野県、北は村上市まで出土していますが、信濃川上・中流域を分布の中心とする越後という地域色の強い土器です。



火焰型土器（左）と王冠型土器（右）

形は下部よりも上部が大きく、焰を想わせる重厚な把手が施されています。また器面には、渦巻きなどが粘土紐の貼り付けによって表現されています。全体的に立体感に富み、縄文の躍動感を感じさせます。この豪壮な文様は、おそらくなんらかの物語を持っていたと考えられますが、今では謎となっています。火焰型土器の一種に、上部の突起の形が王冠型をした王冠型土器があります。

火焰型土器は一見実用的ではないように見えますが、土器の内側には、食物を調理した時にできるオコゲが付着していることから、煮炊きに使っていたことがわかります。しかし、あまり使い勝手が良いとは考えられず、出土点数も少ないことから、土器に刻まれた物語を再認識する特別な日に用いられたことが想像されます。それは、冬至や夏至などの節季、婚礼や葬儀などの人生儀礼の開催期間が想定されます。長野ムラでは、この土器を囲み、どのようなドラマがあったのでしょうか。火焰型土器には、縄文人の世界観が秘められています。

長野遺跡② ～翡翠の大珠が語る縄文時代の社会～ 縄文時代中期ほか

長野遺跡（長野）では、「大珠」という長さ8.2cm、重さ100gの美しい翡翠の首飾りが見つかっています。翡翠は遠い糸魚川市の姫川が原産地で、現代でもネックレスなどに用いられている貴重な宝石です。この大珠は地域の中心的な大きなムラにしかなく、長野遺跡もそのひとつです。

狩猟採集生活では、実りは秋に集中し、一斉に川をのぼるサケや、次々に実をつける木の実などは、収穫を迅速に行なう必要があります。そこで皆の中からリーダーが選ば



翡翠の大珠

れ、収穫の指揮をとり組織的に行なったと考えられます。大珠は長野遺跡に1点しかなく、リーダーの持ち物であったと考えられます。秋の収穫作業後、周辺の多くのムラから人が集い、盛大な秋祭りが行なわれました。身分や階級がなかった縄文社会では、大量に取れた収穫物はリーダーの采配によって平等に分配されました。人々は大珠を着けたリーダーを囲み、自然の恵みに感謝し、酒を酌みかわしたことでしょう。

長野ムラは、八木ヶ鼻を望む、駒出・五十嵐・守門の3河川の合流点に位置し、狩猟採集に絶好の場所にありました。そのため、この地で大珠を持つことができる豊かな地域の中核的なムラが営まれたと考えられます。

長野遺跡③ ～くらしの中心にある炉～ 縄文時代中期ほか

長野遺跡（長野）では、竪穴式住居に設けられた炉がたくさん見つかります。

この炉は、竪穴式住居のほぼ中央に設けられ、暖房器具として住居中を暖めました。また、あらゆる料理を行なう調理具の役割も果たし、肉などを縄文土器に入れて煮込んだり、串に刺した魚を焼いたり、木の実などを砕いてこねた縄文クッキーを焼いたりしました。薪を燃やしてできた灰は木の実のアク抜きに利用されました。



竪穴式住居に設けられた炉

炉の上には火棚をかけ、イワナ、ヤマメやサケの燻製を作ることもできました。炉は生命の源として縄文人たちの生活の中心的役割を果たしました。

さらに炉の火は、暗い夜の照明ともなりました。家族全員で炉を囲み、ほのかな炉の明かりの中で照らされた家族の顔を眺めながら食事をともにしたと考えられます。

縄文時代の炉は、日本の民家の基本構造として後の時代の囲炉裏に引き継がれます。縄文土器のかかった炉を家族全員で囲む縄文の風景は、現代に生きる私たちにも共通する幸せの原風景だと思います。

速報展示 北浦A遺跡 ～山住みのくらし 狩猟・漁労・採集～ 縄文時代前期・後期

五十嵐川右岸の低位段丘上に立地する遺跡（大谷地）で市道大谷地枝の上線の道路改良工事に伴い260㎡を発掘調査しました。イエの跡1軒、土坑9基、柱穴36基、溝2条が発見され、コンテナ10箱分の遺物が出土しました。

この遺跡からは、山住みのくらしの道具が各種出土しています。矢じりの未製品や、魚捕りの網の錘に使った石錘や、採集した木の実を磨り潰す台石と磨石などがみつかった

います。イエの柱を建てる時に土を掘った道具と考えられる打製石斧^{だせいせきふ}も採集されています。



発掘された北浦A遺跡



発掘されたイエの跡

あかまつ 赤松遺跡 ～2,000年前の矢じり工場～ 縄文時代後期・晩期

2,000年前の縄文時代晩期に、矢じり作りの工場と考えられる赤松遺跡(大谷地)があります。

矢じりは矢の先に付け弓矢としてシカやイノシシなどの中小動物を狩猟するために縄文人が発明した日本列島初の飛び道具です。

矢じりの製作は、①原石を採取する②原石を荒割りして素材となる破片を取る③破片の端をシカの角などで押し剥ぎ、刃先などの細部を整形するという工程で行なわれます。

この遺跡では完成品と各工程の石の破片等が六千点以上出土しています。その多くは玉髄(ぎょくずい)という白色や半透明のきれいな石を使っています。この石は適度な硬さで、割りとると鋭い刃ができるため、矢じり作りに適しています。赤松ムラは石の原産地に近く、石材の集積地となっており、この地の利を活かし矢じり作りが専門的に行なわれたのでしょう。

ここで作られた矢じりは一つのムラで使う量をはるかに超えています。「赤松ムラの矢じり」は特産品として、五十嵐川流域や良質な石材を入手することが困難なムラに流通していたのではないのでしょうか。

土地の記憶として残された赤松ムラの矢じり工場は、三条の産業の過去と現在を繋(つな)ぎ未来を語ってくれる貴重なものづくりの遺跡です。



赤松遺跡で作られた矢じり



弓矢と用いた狩猟

ふじだいら

藤平遺跡 ～縄文時代終焉のムラ～ 縄文時代晩期ほか

藤平遺跡（荻堀）は、約2,300年前の縄文時代晩期の大きなムラの跡です。

このムラは、高床式のイェ19棟が、中央の広場を取り囲むように、配置されており、環状集落と呼ばれます。北陸地方は、この高床式のイェで構成された大規模な環状集落が全国で最も発達した地域の一つで、藤平遺跡はその代表的なムラです。

イェの大きさは、4～7mのものと7m以上の大形のものがあります。柱の配置は、主に六角形で、長軸方向に屋根の両端を支える「棟持ち柱」を持つことが特徴です。

イェの入口は、中央の広場を向いています。広場は、祭りなどが行なわれる神聖な場所で、婚姻、葬礼など人生儀礼も執り行なわれたことでしょう。

藤平遺跡の高床式のイェの柱穴には、柱が抜き取られた後、深鉢や浅鉢が埋められたものや土器片が重ねられ、その上に矢じりが置かれ埋められたものなどがあります。藤平ムラの人々が、この地を去る時に、このような儀礼的な埋納を行なったことが考えられます。

それは、縄文時代の終焉を生きた人々が、縄文文化の再生を願いながらも、古い文化と決別しなければならなかった想いを表しているのではないのでしょうか。



縄文時代晩期の土器



高床式のイェの跡



高床式のイェ復元図

おわりに ～縄文の昔から歴史と伝統を育んだ先人たち～

下田地区には縄文時代に多くの先人たちが暮らしていました。私たちの生活は、これらの先人たちが日々自然と向き合い、共存しながら暮らしてきた上に成り立っています。

ここに生まれ育ち、ここをふるさととすることに誇りをもつために、いま一度先人の築いてきた伝統を見直す機会としていただければ幸いです。

水を治め、野を拓いた先人たち ～栄地区の遺跡から～

とぐち

戸口遺跡の調査

調査の概要

市道矢田・中曽根新田線の建設に伴い平成17年に確認調査を行ない、平成18年に本調査が行なわれました。

さらに東側に道が延びるため平成19年にも遺跡の範囲を確認する調査が行なわれました。

今回、栄地区ではじめて成果を展示する機会になりました。

自然堤防上に立地する戸口遺跡では、2つの時期に集中して人々が住んでいた痕跡が発見されています。



戸口遺跡の全景航空写真（西から）

平安時代の戸口遺跡

今から1,100年前の平安時代（9世紀後半～10世紀前半）には、掘立柱建物跡や溝跡が発見され、須恵器や土師器が出土しました。掘立柱建物跡は溝跡で区画されており、ほとんどが桁行2間×梁行3間であり、区画溝の方向にあわせる形で並んでいました。戸口遺跡の東側には8世紀から9世紀の安代・道西・大原遺跡が存在しており、その関係が注目されます。また、10世紀中頃以降急速に衰退することから、村落の形成過程や変化を考える上でも大変意義深いです。

中世の戸口遺跡

今から700年前の中世（13世紀前半～14世紀頃）の遺構は、掘立柱建物跡や井戸跡が発見され、珠洲焼のすり鉢・青磁・中世土師器や砥石が出土しています。わざと底に穴を開けたすり鉢も発見されていますが、用途は不明です。また、轆の羽口が発見されており鍛冶が行なわれていた事が判明しています。中世の遺構は文献に出てくる「大面荘」内に存在すると想定されています。今回の大形掘立柱建物の発見や鉄滓や轆の羽口の出土などから大面荘を考える上で貴重な遺跡と言えます。



すり鉢



轆の羽口

残された文字

吉野屋白山B遺跡 ～土器の大量出土～

栄地区では半ノ木遺跡・岩淵A遺跡・大面町浦遺跡などで墨書土器が数点出土しています。

吉野屋白山A・B遺跡では1989年と1992年にほ場整備に伴う調査が行なわれ、掘立柱建物跡、大量の土器が廃棄された跡や橋の橋脚部が残存した溝跡が発見されました。この土器の中には墨書土器や棒状の工具によって文字が刻まれた刻書土器、漆で文字が書かれた土器が発見されています。墨書土器の内容は「大」と記されたものが最も多く、人名と思われる「秋田万」や人名か地名か定かではありませんが「宇奈」と書かれた土器が出土しています。人名と思われる「梶万呂」と書かれた土器は、岩淵A遺跡からも出土しています。土器の廃棄された理由として、特別な時に利用した土器を同じ場所に捨てるという習慣とも考えられます。

中世の木簡

1997年に調査された新堀村下遺跡では、中世の木簡が出土しており、一面には「蘇民将来之口口」、その逆面には「急急如律令」と書かれており、径約1mの土坑内から漆器の椀とともに出土しました。「急急如律令」は、陰陽道のまじないの決まり文句です。蘇民将来の信仰は諸説あり、現在でも「蘇民将来之子孫也」と書かれた札や符を配ったり、茅の輪くぐりなどがあります。

三条地区では綾ノ前・菖蒲沢遺跡で「蘇民将来」と書かれた木簡が出土しており、蘇民将来の信仰は、三条地区の三条八幡宮や一ノ木戸神明宮の茅の輪くぐりなど現在にも生きています。



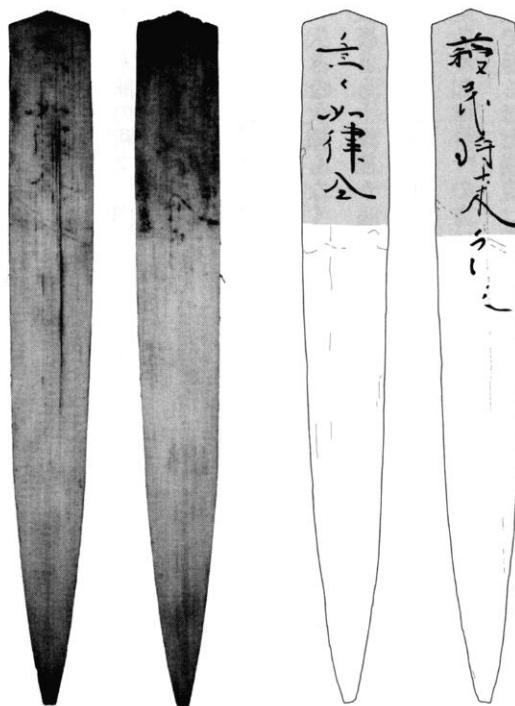
白山B遺跡の土器集中



「秋田万」墨書



「梶万呂」墨書



新堀村下遺跡出土 木簡

三条ものづくりのルーツをたずねて

三条のものづくりのルーツは、実は旧石器時代の25,000年前まで遡ることができます。今から約2万年前に近畿地方と同じ形の石器が、御淵上遺跡（長野）で作られます。その後約1万3千年前に、替え刃式の石器である細石刃が中土遺跡（長野）に登場します。この替え刃の製作技法は、シベリアや北海道など北方系の作り方をしています。これらの石器は、槍先に取り付けられ、狩りに使われたと考えられています。

石と鉄という素材は違っても、すばらしい切れ味の道具を追い求めた想いは今の私たちに伝わり、「金物のまち三条」に活かされています。

復元された旧石器時代・縄文時代の道具

市内の旧石器・縄文時代の遺跡で出土する石器を、当時の技法で復元しました。

旧石器時代の槍は古い順に、割った石のカケラの特徴を活かすナイフ形石器、一番槍らしい形の尖頭器、替え刃式の細石刃を取り付けた槍が作られました。

約12,000年前に縄文時代になると、弓矢が発明され、それを使ってシカなどの狩りが行なわれます。約2,000年前の赤松遺跡（大谷地）は、矢じりの工場と考えられる遺跡で約6,000点もの矢じり製作に関連した石器が出土しています。

磨製石斧は木を切り出したり、くり抜いたりする道具でした。また、打製石斧を使って土を掘ったり、地下に生えている山芋を掘ったりしたのでしょう。

石匙は個人用のナイフで紐を付けて首や腰から提げていたと考えられます。

漁労具は鹿の角や骨を使い、ヤスや魚に刺さると先端が外れ、銚先に付いた紐を使って魚を引き上げる回転式離頭銚などの道具や、釣針などが作られました。



復元された石器



復元された骨角器